

新年の寿ぎ？



札幌市医師会
中村記念病院

鬼原 彰

○私は札幌医科大学医師会時代から半世紀にわたり医師会に加入している。医師は日本医師会に加入することが義務と考えていた一人である。停年(65歳)後の平成17年(2005)4月より当院に勤務して実にこの4月から18年目に突入しており、本人が一番驚いている。現在は日々「老々医療」に努力中である。○医師会に加入してはいるが、「北海道医報」や「札幌医通信」に投稿しようとの考えは全くなく、今日まで会員継続のみを続けていたところ、ある時「北海道医報」事務局より原稿依頼があり、よくよく考えた結果「最初で最後」とことわった上で投稿させていただいた。(会員のひろば、令和2年4月1日、1219号、「専門医、総合医と地域医療」)

○今回は新年の年男、年女とのことで「新春随想」の依頼である。年男の定義もよく知らない私は、新春であるから新しい年への抱負などを書くのがよいのではと思った。しかし、なにせ満83歳の「高齢内科医」であり、終点が近いのに「新年に向かって」もないのではと考えた。ところが医報をよく拝見すると80歳代の会員はわずか50名ほどで、全会員の0.6%である。大学医学部は2つあり、毎年200近くの卒業生がいたと思われるが、医師会を離れたのか、あるいはすでに川を渡られたのかは存じ上げないが、先に「最初で最後の投稿」と申しげたことは撤回し、がんばって2回目の私見をのせていただくことにした。

○むかし患者さんを「患者様」と呼ぶようにと国の指示があった時に、札幌大在職中であつた私はすぐに手をあげて、「患者さん」のどこに問題があるのか、ヤクザのごとき人たちにも「様」をつけるのかと質問をした記憶がある。

亡父が愛読していた週刊新潮を今も継続して25年ほどになるが、その中で「医の中の蛙」を連載されている里見清一先生(本名 國頭英夫61歳、東大医学部卒)も全く同じ意見をその著書で述べていたことを記憶している。

その里見先生が同誌に「臨床医の姿」として表にあるように「常在戦場の人々」としてまとめているが、これまで50年をこえる内科臨床医の経験でもいづれも真実である。

また最近の高齢者の増加を反映し、私の外来もまさしく「老々医療」そのものとなっている。その方々を拝見して感ずることは、それぞれに多数の服薬があり、私の仕事の一つとして、いかにして少しでも

これを減らすか大変苦勞している。この現象は一般にはポリファーマシーと言われ、その改善が叫ばれている。ある時、高齢者施設に勤務されている女性が外来で、「入居者は多くの専門病院のはしごをしており、あつという間に薬が増えたので、試しにその薬をやめたら元気になりました」と私に職場の現状を伝えたことがある。

これも専門化、専門医の負の場面と考えられる。このような医療事情の中で、「国民の信頼に応えるかかりつけ医」の姿を前日本医師会長の中川俊男先生が述べているが、まさしくその通りであり、患者さんが「専門医」を果して自分の「かかりつけ医」と考えるか、また国が「かかりつけ医」を患者さんに指定することも実際には不可能ではと考えている。

2022年(令和4年)10月で満83歳となった老年内科医は、中村博彦当院理事長・院長の御高配で今しばらく「老々医療」を続けられそうである。私も有名な後藤新平の人生訓をめざして生きており、よく考えてみると「新年の寿ぎ」かも知れない。

表 常在戦場の人々

(医の中の蛙 257、里見清一、週刊新潮 22.10.6)

- 「休む」と言う発想がない
- 粉骨砕身しても感謝されないことがある
- 「人間」は自分のことしか考えない

後藤 新平

(安政4年(1857)~昭和4年(1929))

- 台湾総督府民政長官
- 南満州鉄道初代総裁
- 逓信大臣
- 内務大臣
- 外務大臣
- 拓殖大学第3代学長

※ 仙台藩出身

※ 愛知県医学校(現名古屋大学医学部卒)

- 金を残すは下
- 仕事を残すは中
- 人を残すは上